

『存在と時間』における技術論の射程

木村史人(立正大学)

ハイデガーの技術論、「集 - 立(Ge-stell)」という概念に代表される特に後期の思想における技術論に対する批判としては、フィーンバーグが『技術への問い』で提起した批判がつとに有名であろう。すなわちフィーンバーグは、ハイデガーの同名の論文を意識したと思われるその著書において、技術がそれ自体「本質」を有するものと考え、技術の「自体説(substansivism)」、「本質主義(essentialism)」の代表例として、ハイデガーの「集 - 立」の構想を挙げ、そのような捉え方では、技術が実際に社会のなかで実現されていくあり方が捉え損なわれてしまうと批判している。また、技術の発展の仕方が一義的に決まっているという考えを「決定論(determinism)」と呼び、それに対して、技術が「解釈の柔軟性(interpretative flexibility)」を有し、その発展方向が多様に開かれていること、しかし後の視座から見ると、その多様性が見えにくくなること(ブラックボックス化すること)を指摘している。すなわち、フィーンバーグからすれば、ハイデガーの「集 - 立」の構想は、第一に技術に自体的な本質を見て取るという意味で、第二に、そのような本質が一義的に発展していくと考えている点で、誤っているといえる。

以上のようなフィーンバーグの後期ハイデガーに対する批判が、正鵠を射ているかどうかということは、無論検討の余地がある。しかしながら本報告では、あえて『存在と時間』に焦点を絞り、この著作における技術論の可能性を追究したい。というのも、フィーンバーグはハイデガーの後期思想における「取り集め」や「四方域」については、その限界を指摘しつつも部分的には好意的に評価する一方で、『存在と時間』で展開された、技術・道具論に関しては、ほとんど言及していないためである。無論、『存在と時間』の技術論が、言及に値しないものであれば、それもむべなるかなといえるだろう。しかし、報告者は、『存在と時間』の技術論においては、——従来のハイデガー研究では十分に強調されていなかったかもしれないが——後にフィーンバーグが『技術への問い』において「二次的(secondary)道具化」として、これまでの技術観では十分には見て取られていないとした技術のあり方が、掬い取られていると考える。そのため、フィーンバーグの洞察を踏まえて『存在と時間』の技術論を再読することは、これまでのハイデガー研究において度々用いられながら、その際に強調されなかった『存在と時間』第一部第一篇第三章の技術・制作論の豊かな射程に焦点を当てることにもなるはずである。さらにまた、以上の視座からの読み直しは、『存在と時間』における技術の思想を、共存在、時間性、歴史性とも連関させて解釈することを可能とにするとと思われる。